

第II部

地域研究の牽引者たちからの メッセージ

地域研究では研究者と対象地域の関係が常に問われるため、地域研究を語るときには対象への「思い」に触れないわけにはいかない。地域研究の牽引者たちが次世代の地域研究者に伝えたい地域や地域研究への「思い」を語る。

現代的状況に発言する

遅野井茂雄（おそのい・しげお）

筑波大学人文社会系・教授、人文社会科学研究所国際地域研究専攻長



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五二年、長野県
- ② 専門分野・地域……比較政治学・ラテンアメリカ、アンデス地域
- ③ 学歴……東京外国語大学スペイン語学科、筑波大学大学院修士課程地域研究科（地域研究専攻）
- ④ 職歴……政府系研究所勤務（二六歳、一三年間）、その間、ペルー問題研究所（在リマ）客員研究員（二九歳、二年半）、外務事務官（在ペルー日本大使館書記官、三五歳、約四年間）、その後、私立大学講師・助教授（四〇歳、三年間）、私立大学助教授・教授（四三歳、七年間）、筑波大学教授（五〇歳〜現在）、日本ラテンアメリカ学会理事長（五二歳、四年間）、日本学術会議連携会員（地域研究委員会、五四歳〜現在）、大学院国際地域研究専攻長（五五歳〜現在）

メッセージ

地域研究者になること

学部時代は国際関係論を学び、スペイン・フランコ体制の外交政策を卒論でまとめた。亜流ファシズム体制がなぜ第二次大戦後三〇年間に生き延びることができたのか、その巧みな現実主義外交を追跡した。

大学院でラテンアメリカに地域を変更。軍政の全盛期の一九七〇年代、事例研究にベラスコ軍政をとりあげたことが縁でペルーにかかわる。戦後第一世代の研究者たちの研究会に参加する幸運を得て、地域研究を意識した。

現地主義を重んじる研究機関に職を得て地域研究者としてのアイデンティティを確立。派遣先の研究所ではペルー研究における学際性の重要性をたたき込まれた。大使館時代は、仮説を立てて政治情勢を分析する訓練を学んだ。

第1部「現場の悩み三〇問」を読んで

12「ヨーロッパの地域研究は成り立つのか」について、先進国もすべて地域研究の対象で、そこには日本研究も含まれるべきである。日本文化に浸りきった我われも、外国人の日本研究から多くを学ぶことがある。また、質問項目になかったのは、事態の推移や変化を見据える地域研究の予測可能性の視点である。社会構造の変化や状況変化を見極めることで、情勢の予測性は十分可能と考えている。

⑤ 現地滞在経験……ペルー問題研究所客員研究員、在ペルー日本大使館書記官。民主化後間もないペルーの解放感漂う明るい雰囲気と、しだいに民主主義の危機が深まり、既成政治の崩壊とフジモリ政権の誕生にいたる一九八〇年代を体験した。その後、調査でペルー、ボリビア、エクアドル等に出かける。

⑥ 研究方法……フィールド経験は現地感覚を保つ意味で不可欠。定点観測。面談、参与観察が主。

⑦ 所属学会……日本ラテンアメリカ学会、日本比較政治学会

⑧ 研究上の画期……一九八〇年代後半のペルーの社会経済危機とフジモリ政権の誕生と改革。危機の体験があるか無いかでフジモリ改革の評価は異なる。

⑨ 推薦図書……カール・ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』（東洋経済新報社、一九七五年）

地域研究の魅力と可能性

英語に加え現地語の習得、二つ以上の専門性（学際性）、地を這いまわる体力、勘や洞察力など、地域研究には何重苦もの困難さが課せられる。三〇年前の研究環境は、情報収集の困難さ、円安（一ドル＝三〇〇円）、航空賃やコピー代の高さなど、とくに南米研究は厳しかった。

厳しいなかで研究を続けてこられたのは、具体的な人間関係のおかげだろうと思う。今でも現地調査のかなりの部分は人との出会いであり、それを通じた仮説の確認作業といっても過言でない。長年にわたり積み上げられた人との関係という資産のなかに、対象の国や地域をトータルで理解・判断することが求められる地域研究の真髓があるように思われる。そして身の毛がよだつような歴史的瞬間との出会いは、苦勞に対して神様がくれる贈り物だろう。

いうまでもなく日本のような島国には常に外国のことをフォローし続ける研究者が不可欠である。それを怠るようでは、未来はないだろう。今でも地域研究は「日本が国際社会で生きていくための海図」（梅棹忠夫）である。アメリカのアフガンやイラクでの躰きは、地域研究を疎かにしてきたわけではないか。地道な基礎研究に立って、その時々の政権におもねることなく、現代的状況に対し発言することを使命とする地域研究者の役割は大きい。